

里山林整備の手引き

～みんなで里山を育てよう～

目 次

第1章 兵庫県 の 里山林 の 現状 と 課題	
1. 里山林とは	1
2. 里山林 の 生き物	1
3. 里山林 の 現状	2
4. 里山林整備 の 必要性	2
第2章 兵庫県 の 里山林整備 の 方向	
1. 整備 の 基本方針	3
2. 整備計画 の 立案	4
第3章 兵庫県 の 里山林 の タイプ分け	
1. 兵庫県 の 里山林 の タイプ	7
2. タイプごと の 目標林 の 設定	8
第4章 里山林 の タイプ別整備手法	
1. 里山林 の 基本的な整備手法	9
2. 整備後 の 維持管理作業	11
3. 里山林 の タイプ別整備内容	12
第5章 里山林 の 利活用	21

この手引きは、平成10年3月に兵庫県農林水産部林務課が発行した『里山林整備の手引き』をもとに、県ホームページ掲載等のため再編集したものです。

【兵庫県農林水産部農林水産局豊かな森づくり室】

第1章 兵庫県の里山林の現状と課題

1. 里山林とは

薪炭林あるいは農用林として古くから人々の生活にかかわってきた集落周辺などの林が里山林です。県下ではコナラなどの落葉広葉樹林やアカマツ林が主なものです。これらの林は地形などの自然条件や今までの人とのかかわり方などの違いによって生息場所や状況が異なっています。



里山林の風景

2. 里山林の生き物



従来の里山林は、生活（燃料や肥料）のために下草刈りや定期的な伐採などが繰り返し行われ、そうした環境に適応した様々な生物が生息してきました。昔話によく登場すし身近に見られたタヌキやキツネ、カブトムシやクワガタムシはそういった里山林に生活する生き物です。また、それらの生き物のなかには、その数が減少している貴重な種も多く含まれています。里山林の調査では下の表のような貴重種が確認されています。

写真上：エビネ

中：モリアオガエル

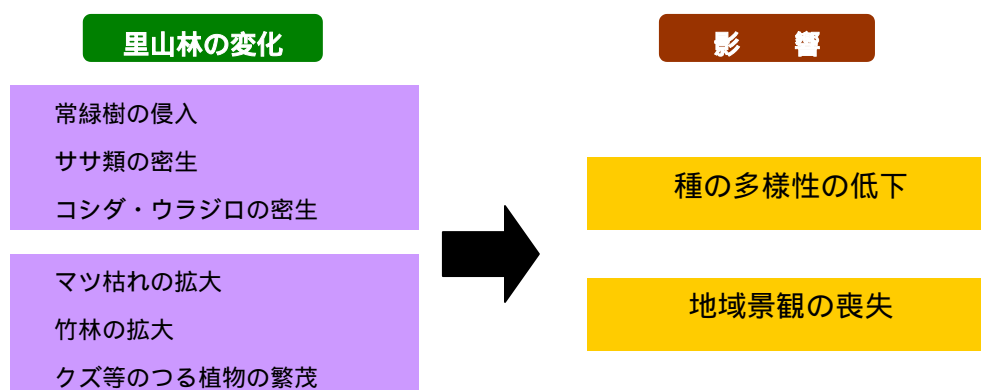
下：ギフチョウ

里山林の調査で確認された貴重種

	植 物	動 物	チョウ
但 馬	エビネ、アツミカンアオイ、キキョウなど	ニホンリス、サシバ、モリアオガエルなど	キマダラモドキ、ギフチョウなど
丹 波	エビネ、ムヨウランなど	カワセミ、シュレーゲルアオガエルなど	ミヤマチャバネセセリなど
東播磨	エビネ、イシモチソウ、モウセンゴケなど	アオゲラ、ハッチョウトンボなど	-
西播磨	サギソウ、カキラン、エビネ、エドヒガンなど	ニホンリス、アオゲラ、メダカなど	オオムラサキなど
淡 路	ハンゲショウなど	クチキコオロギなど	-

3. 里山林の現状

生活や農業に石油・石炭や化学肥料が使われるようになって、薪や炭、あるいは落ち葉から作った堆肥などが使われなくなり、里山林と人間の生活とのかかわりがうすれ、林の手入れをしなくなってしまいました。そのため、林内にはササ類や日陰でも生息できるヒサカキなどの常緑樹ばかりが増え、比較的明るい環境に生える植物やこれらの植物と共に生息してきた動物が生活できなくなってきました。また、マツ枯れによる被害を受けた林も急激に広がってきました。その結果、各地で里山林が荒廃し、生物の種の多様性の低下や地域の特色ある景観が失われるといった影響がでてきています。



1. 里山林整備の必要性

では、なぜ今、里山林を整備する必要があるのでしょうか。

それは、近年環境保全の重要性がクローズアップされ、ライフスタイルの多様化とも相まって、森林に対する要求、あるいはかかわり方が変化しており、特に身近なところにある里山林については、新たに環境林としての価値が見いだされてきたからです。たとえば、自然とふれあうレクリエーションの場や環境教育の場としての価値、緑の森が人々の心にうるおいをもたらす景観的な価値、さらには野生生物の急速な減少や絶滅が危ぐされている中で生物の多様性を守る空間としての里山林の価値が注目されています。

このような自然環境に対する人々のニーズの変化にこたえるために、里山林を保全し、適正に整備・育成する必要性が高まっているのです。

第2章 兵庫県の里山林整備の方向

1. 整備の基本方針

(1) 目的

兵庫県では「森の緑で心の豊かさ」を合言葉に、人と森とが共生できる森づくりをめざして、里山林の整備を次ぎのような目的を持って進めています。

地域の特色ある風景や景観の形成
多様な動植物の保存や保全
健康、環境教育、レクリエーション的利用
の促進

(2) 整備方針

現在の里山林は高木林が多くなっています。こうした高木を伐り払って低林として維持していくには定期的な伐採が必要で、その管理には労力が多くかかります。これらの現状をふまえ、兵庫県では、現在の森林を基本として、林内での活動に適し、またその地域に応じた多様な動植物が育つ明るい高木林として育てていく整備を基本的な方針としています。

ただし、現在の林の状況や今後の管理の可能性などによっては、低林管理などの多様な整備も積極的に行うこととしています。

いずれにしても、中低木を中心に除伐するなどして林内をある程度明るくすることが必要になってきます。

特に、生物の多様性を図るという観点からは、下表の植物は現在の林の状況や土壌の流出などに注意しながら原則として除去する方針です。

また、植生の乏しい場所に植栽を行う場合は、その地域に自然に生育している樹種を用いる方針です。

主に除去する植物

林内の樹木に巻きついたつる植物

ヒサカキなどの低木の常緑広葉樹

ネザサをはじめとする密生するササ類

密生するコシダ、ウラジロ

周辺樹木（特にコナラ林など）へ拡大している竹

ヒサカキなどは萌芽力が強いので、すべて伐採しても種の多様性に影響はありません。

2. 整備計画の立案

このような目的や方針に沿って里山林の整備を進めるわけですが、先に述べたように、里山林の植生や林の状況は地域によって条件が異なり多種多様です。したがって、里山林の整備を始める前にまず現地調査を行い、その里山林にあった整備計画を立てることが必要です。

(1) 現地調査

植生の状況、地形及び土壌条件、林内に生息している動植物などについて調査します。

植生調査

里山林整備で最も基本となるもので、主にどのような種類の木が生えているか、また混み具合はどうかといった状況を調査します。大まかにその林を構成する樹種からコナラ林、アカマツ林、シイ林などに区分して、植生（林のタイプのこと）ごとに整備計画を立てる資料とします。

地形及び土壌条件

作業の安全性や、土壌の流出防止のために地形や土壌の状況を把握します。尾根や谷を区分するとともに、特に急傾斜の場所（「登るのに何かつかまりたい感覚」が目安）がないかに注意します。

また、土が崩れている場所がないかについても注意して見てみましょう。

林内に生息している動植物（特に貴重なものはないか）

貴重な種類については、専門家の知識が必要な場合がありますが、地元の詳しい方に聞くのも良い方法です。

また、きれいな花を咲かせる植物（ササユリやリンドウなど）里山林の貴重な財産なので、その分布を記録することも大事なことです。

ため池や湿地は、貴重な種類が生息している可能性の高い場所なので注意が必要です。整備については20ページを参照ください。

文化財

里山林は生活場所の身近なところにあるので古墳などが見られることがあります。

また、今は使われなくなった炭焼きガマも見られます。これらは大切な文化財なのでこわさないよう注意しましょう。



炭焼き釜跡

(1) 現地調査

以上のような調査を行ったうえで、整備しようとする区域を以下のような3つのゾーンに分けて整備計画を立てます。

保全区

寺社やお寺の周りには、鎮守の森として守られてきた林が多く見られます。また、里山林にも珍しい植生が見つかることもあります。このような林は保全区として現状を維持する方が望ましいでしょう。

また、土壌の崩れやすい場所や、作業するには危険な急斜面が続く場所は、整備を行わず保全とします。



岩が露出した急傾斜地

育成区

積極的に林内を整備したり維持管理作業を進めていくゾーンです。里山林の荒廃している現状からみて、整備の内容に差があるものの、上記の保全区以外の大部分の区域は育成区に該当します。



整備して明るくなった里山林

活用区

育成区の中でも地形が平坦で林内利用の拠点になるような所は、育成区よりも多めに木を伐る整備を行い、林間広場などとして活用すると良いでしょう。



丸太のイスを置いた林間広場

(3) 整備計画

ゾーン区分を行ったうえで育成区と活用区についてどんな作業を行っていくか整備内容を計画します。

森林整備計画

整備を実施する里山林のタイプによって目標とする林を定め、どのような作業を実施していくかを定めるわけですが、この代表的なものの目標については、「第3章」(8ページ)、作業については「第4章」(9ページ以降)に示しました。

なお、これらの作業を一度に大面積の林について行うと急激な環境変化をおこす危険性があり、また時間的にも労力的にも大変な作業となります。そのため、歩道や管理道の付近から様子を見ながら毎年少しずつ進めて行くと良いでしょう。

動線・施設計画

里山林をいろいろな目的に活用するには、林の中に入り込みやすいような遊歩道や管理道を計画します。この際、なるべく高木を伐ったり、土を削ったりしなくてすむようなルートを選びます。さらに、必要に応じて利活用のための施設(案内板や道標、ベンチ等)の配置等についても計画します。



里山林整備で設置した道標



伐採木を利用したベンチ



整備された遊歩道

第3章 兵庫県の里山林のタイプ分け

1. 兵庫県の里山林のタイプ

兵庫県の代表的な里山林としてはコナラ林やアカマツ林が広く見られますが、南部の暖かい地方には照葉樹のシイやカシの林も見られます。

このうちアカマツ林では、マツクイムシの被害によりマツの枯損が進行し、アカマツ林からコナラ林やソヨゴ林へ移行しているところが多く見られます。

このほか、スギ、ヒノキの植林地や竹林が広がっているところも見られます。



コナラ林

多く見られる
落葉広葉樹



アカマツ林

多く見られる針葉樹林
マツ枯れの進行が課題



シイ・カシ林

照葉樹林

また、兵庫県は瀬戸内海側から日本海側までと広く、地形も低地から山地まで含まれています。そのため、地域によって気温・降雨量を中心に気候が異なり、同じコナラ林でも生えている種の組み合わせによってタイプが分かります。

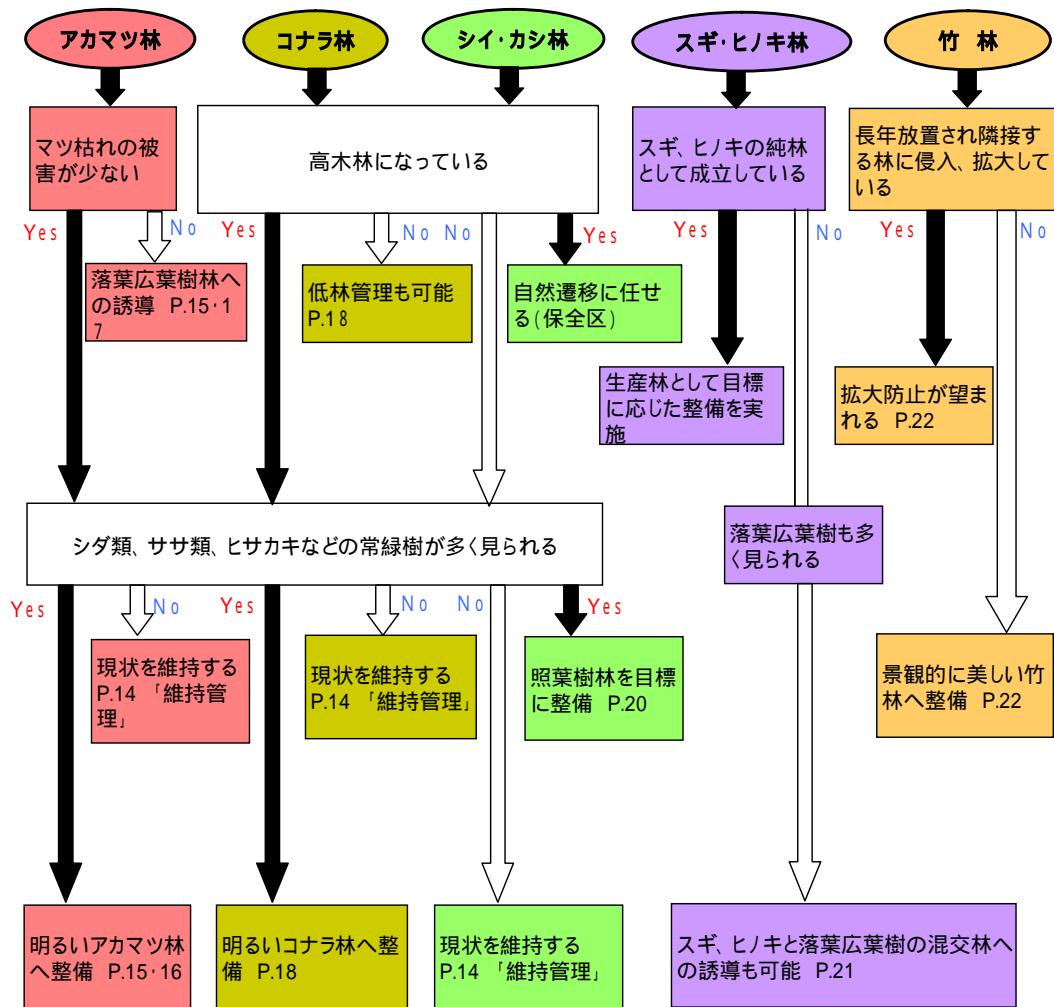
林のタイプ (植物社会学による分類)		地 域						
		阪	神	東播磨	西播磨	但馬	丹波	淡路
アカマツ林	アカマツ - モチツツジ群集							
	アカマツ - ユキグニツバツツジ群集							
コナラ林	コナラ - アベマキ群集							
	コナラ - オクチョウジザクラ群集							
ミズナラ林	ミズナラ - クリ群集							
シイ・カシ林	コジイ - カナメモチ群集							
	スタジイ - トキワイカリソウ群集							
	ウバメガシ - トベラ群集							
	ウバメガシ - コシダ群集							

群集... いろいろな種が同じ場所に集まって生育している集団のこと。そのうち植物社会学(植生を認識・分類する学問)により認められ、特定の種組成、生育条件を持つものを「群集」という。

2. タイプごとの目標林の設定

地域ごとに異なったタイプの林があり、また個々の林をどのゾーン区分に位置づけるかによって目標とする林が違ってきます。また、目標とする林が違ってくれば、当然整備の作業内容も違ってきます。ここでは、兵庫県の主な里山林の状況から現況と目標林を以下のように整理しました。

なお、目標林の後にその目標に沿った整備手法のページを示してあります。



スギ、ヒノキ材の生産を目標とする整備内容については、この手引きでは記述していません。

照葉樹林について

シイやカシなどの常緑広葉樹からなる照葉樹林は、社寺周辺の鎮守の森に多くみられますが、西日本で人の手が加わらずに最も遷移が進んだ状態の林（極相林）といえます。明るい里山林とは、また違った生き物の生活場所となっているとともに、失われつつある林なので、保存し、さらに立派な照葉樹林に育てることを目標としています。

第4章 里山林のタイプ別整備手法

1. 里山林の基本的な整備手法

前章までは里山林の現状や兵庫県内の里山林のタイプについて述べてきました。この章では、里山林を実際に整備していく方法について記述していきます。

森林整備の作業には大きく分けて「下刈り」、「つる刈り」、「除伐・間伐」があります。目標に合わせてこの作業を順次進めていきます。

下刈り

作業内容

林床にコシダ、ウラジロやササ類が繁茂している場合は、多様な植物が生育できるようにそれらを刈り取る。生育させたい幼樹のじゃまになる草や低木を刈り取る。

作業難易度

比較的容易。

カマを用いる。低木の常緑広葉樹を除去する場合はノコギリを用いる。

時期

夏期に行うのが最も効果的であるが、夏期の下刈りは植物に対するダメージが大きすぎて裸地化する危険性もあるため、場所によっては秋～冬期に行う場合もある。低木の除去は秋～冬期に行うのが一般的である。



つる切り

作業内容

樹木（特に高木）に巻き付いて、生育を抑えているフジやクズなどのつる植物を除去し、樹木の健全な生育を促す。

作業難易度

比較的容易。

カマや剪定バサミ、ノコギリを用いて根元部分でつる植物を切ったのち、なるべく取り除く。高いところは上部が枯れてからつるの処理を行う。

時期

根元部分は夏期に切り、つるの処理は冬期に行うと作業が比較的楽である。



除伐・間伐

作業内容

枯死木や衰弱木、病害虫に侵された木を伐採する。

林内を明るくするため、中・低木のソヨゴ・ヒサカキなどの常緑広葉樹を伐採する。

必要に応じて高木の密度調整（間伐）やたくさん株立ちしている木の株整理（弱っている枝や細い枝をまびく）を行う。侵入する竹がみられる場合は伐採する。

伐採した樹木は1 m程度に伐りそろえ、木の根元などに分散させて集積する。



作業難易度

比較的大きな樹木を伐採するため難易度は高く、また危険を伴う作業である。

熟練した人はチェーンソーを用いる。一般の人はノコギリを用いて株整理や伐採可能な常緑広葉樹、竹の除去を行う。

時期

植物に対するダメージの大きさでは夏期が効果的であるが、比較的重労働なことから秋～冬期に行うのが望ましい。

また、萌芽再生を期待する場合は冬期に伐採を行うと再生しやすくなる。

【注意すること】

落葉広葉樹の株を整理する場合は、伐りすぎないように除々に作業する。

（徒長したツツジ類は根元で切らず、地上1 m位残す方が、早く花を咲かせる）

高木の巻き枯らし（環状剥皮）

間伐したい樹木が高木で、伐採や伐採後の処理が難しい場合、幹の途中で幅10 cm、深さ1～2 cm程度を一周り削りはがすことで、養分の流動を止めて枯らすことができる。

結果的に枯れ木が残るが、急激な環境の変化を避けたい場合など、長期的に見て有効な方法と考えられる。



2. 整備後の維持管理作業

コシダ、ウラジロやササ類が多く見られる場所は、生育状況を見ながら最低1～2年に1回程度の下刈りを行う。

ネザサは夏期に刈り続けると消滅するが、冬期に刈り取るを行うと背を低く抑えられるので、目的に合わせた管理時期を設定する。

保存した若い木や植栽した木の周辺については、その木がまわりの草本より高くなるまで毎年下刈りを行う。

整備後は、約5年ごとに林の状況を調べ、目標に合わせて除伐・間伐などの作業を行う。

侵入する竹がある場合は、春にタケノコを除去する。

身近な・自分たち

の里山林の整備

これまで、兵庫県の代表的な里山林について、基本的な整備の方法とその手法について示してきました。これから、これらの方針や手法に基づいた各タイプの整備内容を示しますが、この通りにしなければならないというものではありません。その地域、場所によって状況は違うでしょうし、またそこにかかわっていく人々にとって自分たちの林としての意味を持った目標林があっても良いでしょう。

たとえば、ヤマザクラやカエデの林を育てるのもいいかもしれませんが、野鳥の集まりやすい実のなる木や、花のきれいなヤブツバキやフジを優先して残したりすることによって、その里山林がより身近なものになるでしょう。



ヤマザクラの林

紅葉した里山林

3. 里山林のタイプ別整備内容

ここでは、具体的にどのような木や草を保存し、あるいは伐採、除去すればいかといった整備内容について、林の各タイプ別に示しました。

アカマツ林

- 健全なアカマツが多く残っている林 -

目標林・・・高木のアカマツを維持しながら、その下にアカマツの後継樹や落葉広葉樹の育つ林

- アカマツの枯損が顕著な林 -

目標林・・・コナラなどの落葉広葉樹を主体とした林

(ふたつの目標林に共通)

	高 木	中 木	低 木	草本・つる
保 存 種	アカマツ、コナラ、ヤマザクラなど	リョウブ、タカノツメ、マルバマンサクなど	コバノミツバツツジ、モチツツジ、ミヤマガマズミ、ナツハゼなど	ショウジョウバカマ、オオイワカガミなど
伐 採 種	アカマツ(枯死木)など	ソヨゴ、アラカシなど	ヒサカキ、イヌツゲなど	コシダ、ウラジロ、ネザサ、チマキザサ、フジ、クズなど

- 留意事項
- ・ マツタケ山を目標とする場合は、整備内容が大きく異なります。
 - ・ マツクイムシにより枯れたアカマツの木は、放置すると被害拡大のもとになるため、焼却するか、薬剤による処理を行うのが望ましい。
 - ・ アカマツの枯損が顕著な林で後継木がない場合は、可能であればコナラなどの落葉広葉樹を植栽する。

里山林整備における生育本数と除伐本数の例 (100平方メートル当たり)

地域区分	高さ区分	整備前本数	除伐本数	除伐率
瀬戸内海側	高～中木(3m以上)	59	41	約70%
	低木(3m未満)	78	31	約40%
日本海側	高～中木(3m以上)	55	23	約40%
	低木(3m未満)	67	27	約40%

瀬戸内海側の林は中木が非常に多く、林内の見通しが悪いため多めに除伐している。

- 健全なアカマツが多く残っている林 -



整備前



整備されたアカマツ林



整備後



10年後

- アカマツの枯損が顕著な林 -



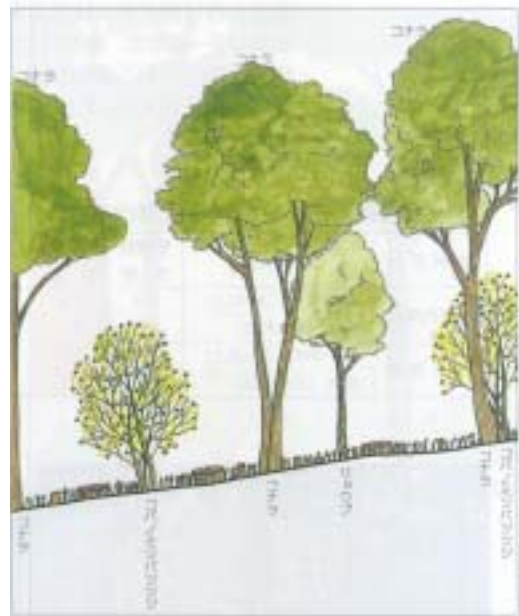
備前



アカマツの枯損の顕著な林



整



整備後



10年後

コナラ林

目標林・・・コナラを主体とした落葉広葉樹の高木林

	高 木	中 木	低 木	草本・つる
保 存 種	コナラ、クヌギ、アベマキ、カスミザクラ、ヤマザクラなど	リョウブ、タカノツメ、マルバマンサク、マルバアオダモなど	コバノミツバツツジ、ミヤマガマズミ、ムラサキシキブなど	ショウジョウバカマ、エビネ、ササユリ、カンアオイ類など
伐 採 種	アラカシ、シラカシなど	ソヨゴ、ヤブツバキなど	ヒサカキ、イヌツゲなど	コシダ、ウラジロ、ネザサ、チマキザサ、フジ、クズなど

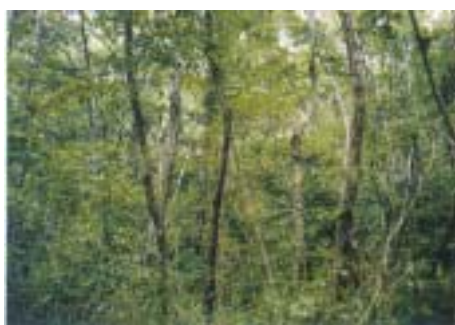
留意事項 《低林管理の場合》

- ・根元から伐採する。伐採の周期は15～20年程度。
- ・伐採後2～4年は、株から出た萌芽枝が草本に負けないように草刈りを行う。
- ・伐採後5年目頃に、萌芽枝のうち成長の良い幹を3本程度残し、成長の悪い幹を伐る。

注) およそ30年生をすぎた林は、萌芽枝の再生力が衰えるので低林管理には適さなくなる。

里山林整備における生育本数と除伐本数の例 (100平方メートル当たり)

地域区分	高さ区分	整備前本数	除伐本数	除伐率
瀬戸内海側	高～中木(3m以上)	44	29	約65%
	低木(3m未満)	85	31	約35%
日本海側	高～中木(3m以上)	26	10	約40%
	低木(3m未満)	12	2	約20%



整備前のコナラ林



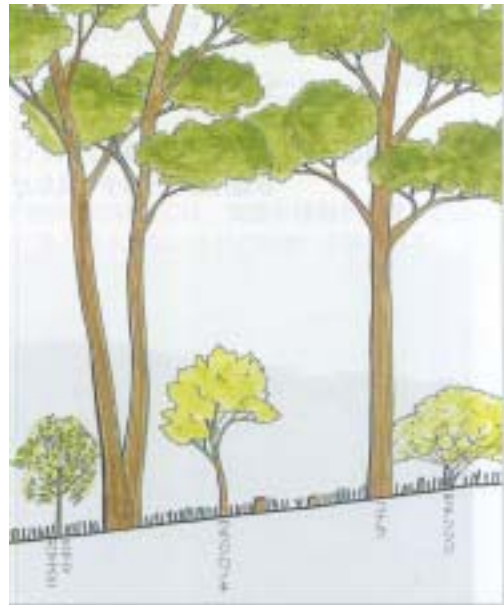
整備されたコナラ林



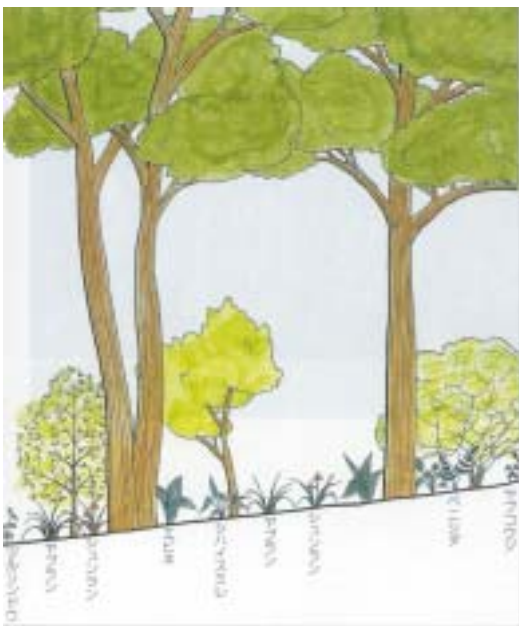
整備前



黄葉したコナラ林



整備後



10年後

シイ・カシ林

目標林・・・・・・・・シイ・カシ類の大木が育つ照葉樹林

- ・県下ではコジイ、スダジイ、アラカシなどからなる林が多く見られますが、淡路島沿岸を中心とした地域では主にウバメガシ林が見られます。

ウバメガシ林

目標林・・・・・・・・ヤマモモなどの混成するウバメガシ林

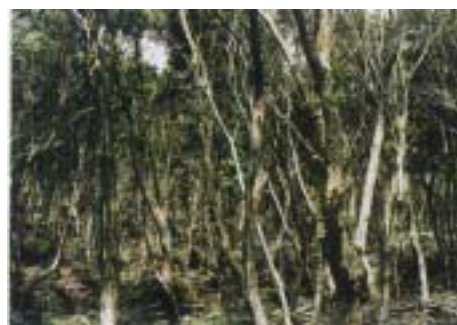
下記の表の下線を記した種はウバメガシ林での保存種に該当する。

	高 木	中 木	低 木	草本・つる
保 存 種	シイ、(コジイ、スダジイ)、アラカシ、 <u>ウバメガシ</u> 、 <u>ヤマモモ</u> 、 <u>クロマツ</u> など	ヤブツバキ、カクレミノ、トベラ、マサキなど	サカキ、アオキ、 <u>シャリ</u> ンバイなど	ヤブコウジ、ジャノヒゲ、キンラン、ベニシダなど
伐 採 種	アラカシ(枯損木)など	ソヨゴなど	ヒサカキ、イヌツゲなど	コシダ、ウラジロ、ネザサ、チマキザサ、フジ、クズなど

- 留意事項
- ・常緑樹のみで構成されている場合が多く、密度調整が主な作業となる。
 - ・歩道付近から様子を見ながら除々に整備を行う方がよい。



照葉樹林の全景



ウバメガシ林

スギ・ヒノキ林（落葉広葉樹が多く混生している林の場合）

ここではスギ・ヒノキと落葉広葉樹の混交林に仕立てる場合を述べていますが、スギ・ヒノキの純林で適正に間伐や枝打を行い、林床植生の豊かな美林を育てるのも木材の生産のみならず、環境林としても役に立つものとなります。

目標林・・・・・・・・スギ・ヒノキとともに多様な広葉樹の生育する林

- ・スギ・ヒノキに混じって広葉樹が育成している場合は、広葉樹を残しながらスギ・ヒノキの密度調整の間伐を実施する。

	高 木	中 木	低 木	草本・つる
保 存 種	スギ、ヒノキ、コナラ、クヌギ、サクラ類など	リョウブなど	コバノミツバツツジ、ミヤマガマズミ、ムラサキシキブなど	オオイワカガミ、ショウジョウバカマなど
伐 採 種	スギ(成長の悪い木)、ヒノキ(成長の悪い木)など	ソゴゴなど	ヒサカキ、イヌツゲなど	コシダ、ウラジロ、ネザサ、チマキザサ、フジ、クズなど

- 留意事項
- ・谷部に成立している成長の良いスギ植林地の林床には、貴重な植物が生育していることも多くみられるので、作業時に踏みつぶさないなどの配慮が必要である。



整備されたスギの大木林



スギ・ヒノキと落葉広葉樹の混交林の様子

竹林

目標林・・・タケノコ掘りのできる美しい竹林

	高 木	中 木	低 木	草本・つる
保 存 種	モウソウチク、ハチク (タケノコが食用になる)、マダケ(食用に適さない)			ベニシダ、エビネ、カンアオイ類など
伐 採 種	モウソウチク、ハチク、マダケ(枯損竹、老竹)	ソヨゴなど	ヒサカキなど	ネザサ、チマキザサ、クズなど
維持管理	<p>・竹林を維持する場合は竹の生育状況をみながら1～2年に1回程度春にタケノコや老竹を除去する。</p> <p>・タケノコ掘りを目的とする場合は、太い親竹が成長するように、より管理の頻度を高くし、場合によっては耕うん及び有機質の施肥も行う。</p>			

留意事項 《竹林拡大を防止する場合》

- ・拡大をくい止めたい周囲に崩壊に注意しながら溝切り(深さ1mくらい)を行う。
- ・林相転換を行う場合は、竹を皆伐した後、コナラやクヌギ等を植栽する。
- ・皆伐した竹林については、その後5年ほど毎年出てきた竹を夏に伐採すると、かなり竹の勢力が衰える。



落葉広葉樹林内に侵入した竹



整備された竹林

貴重な湿地を残すための保全対策

里山林の中には小規模な湿地やため池がみられることがあります。そこには貴重な植物や昆虫が生息していることがあります。そのような湿地を荒らさないように十分注意することがまず必要ですが、貴重だからといってさわらないでくと、自然の遷移によって近い将来には草地や低木林になって貴重な生物が生きていけなくなる場合もあります。

小さな湿地を湿地として残すためには、周辺などを整備して、自然の遷移の進行を抑えてやる必要があります。

- 作業内容
- ・湿地の周囲（あるいは湿地内）に生育する樹木をすべて伐採し、なるべく湿地から離れた場所に集積する。
 - ・湿地内に踏み込める場合は、冬期に湿地内に生えている草をできるだけ刈り取って、湿地から離れた場所に持ち出す。

これらの作業は、湿地内に光りが十分あたるようにすることと、周辺に降った雨が湿地に集まりやすくすること、さらには湿地にあまり栄養が入らないようにすることを目的としています。そのため、景観は一時的に損なわれる場合がありますが、この整備によって衰退していた湿地特有の貴重な植物が短期間に回復した事例もあります。



湿地の代表種モウセンゴケ



水質のきれいな池に生えるヒツジグサ

第5章 里山林の利活用

里山林は動植物の生育・生息空間であるとともに、人間にとっても「身近な自然」であり、そこで楽しんでこそ里山林の価値がさらに大きくなっていくと考えられます。

下刈りなどの作業もゆっくりとしたペースで行えばレクリエーションになります。「この木は残そうか」とか、「この花は私が咲かせたのよ」と言いながら作業するのはまさにボランティアならではの楽しみになることでしょう。

作業に参加する以外にも里山林での楽しみはたくさんあります。



自然観察	収 穫	工 作
花がたくさん咲く春	春のタケノコ掘り	間伐材を使ったクラフトづくり
昆虫が鳴く夏や秋	秋の木の实取り	アケビづるやマツボックリを使った
紅葉や実が楽しめる秋	冬の炭焼き	リースづくり
多くの野鳥や枯野が見られる冬	焼いた炭でのバーベキュー	ドングリを使ったおもちゃづくり